



「帝国日本の気象観測  
ネットワーク V  
南洋庁」

山本晴彦 著

農林統計出版 2017年12月  
262ページ, 3,000円 (本体価格)  
ISBN 978-4-89732-375-6

本書は、同著者による、第2次世界大戦前、戦中期に日本が展開した気象観測ネットワークに関する5冊目の著書である。

- |               |         |
|---------------|---------|
| (I) 満洲・関東     | (330pp) |
| II 陸軍気象部      | (531pp) |
| III 水路部・海軍気象部 | (589pp) |
| IV 樺太庁        | (377pp) |
| V 南洋庁         | (262pp) |

本書(Vのみ)を手にした時、私は、気象庁職員やOBでなく、地理学や気候学の研究室の所属でない方が、このような地道な、また記述中心の仕事に時間を割き、執筆を続けておられることに、率直な驚きを覚えた。Vを完読後、書店でI~IVの「まえがき」と全体をざっと拝読し、著者(山本氏)の、一連の仕事のきっかけの1つが、1998年夏季の旧満州の河川の調査(豪雨で氾濫)の際、中国の研究者が1945年以前の偽満州国の資料は使わないと言っていたことが記載されており、納得した次第である。その後、著者が旧満州の資料に触れたことをきっかけに、財団への予算申請、科研費の分担者として活動されながら、これら貴重なお働きを続けてこられたようである。

本書物には、南洋庁観測所(南洋庁気象台)の創設から終焉までの気象観測業務などの変遷がまとめられている。1922年(大正11年)にパラオ諸島のコロール島に開設されて以来、1942年(昭和17年)に、南洋庁気象台職員が第四艦隊司令部附となるまで、約20年間存在した。各章立ては次のようになっている。私にとって興味深かった点を中心に紹介させていただく。

- 第1章 ドイツにおける南洋群島の気象観測
  - 第2章 南洋庁観測所の創設と拡充
  - 第3章 南洋庁観測所および出張所の観測業務
  - 第4章 南洋庁観測所の気象資料
- 終章

第1章には、太平洋諸島のドイツ保護領であるドイツ領ニューギニアに開設された観測所について、1891-1914年における18箇所の雨量計および雨量以外の気象要素の観測期間や地図も掲載されている。その後第1次世界大戦の際、日本政府は、日英同盟に基づきドイツに宣戦布告し、ドイツの保護領であった南洋諸島を日本海軍が占領し、軍政を開始した。関連する日誌では、1914年11月のパラオでの気象が記録されたとのことである。

そして、第2章には、1922年から1945年までの、南洋庁観測所(南洋庁気象台)と、(海軍)水路部による気象観測所、出張所、測候所の開設状況についてまとめられている。開設に関する経費や俸給表の記載もあり、なかなか興味深い。気象現象として、「既往に於ける南洋群島暴風」が本の活字で(写真でなく)、南洋における暴風被害が、日時、被害地(島)名、報告者名と共にまとめられている(1918-1936年)。気象分野で長期再解析データが公開されるようになった現在、当時の暴風をもたらした気象状況の解析に有益と思われる。

第3章には、南洋庁観測所の庁舎や分室、観測器機の写真、測風気球や太陽輻射熱観測風景(当時)の写真が多数掲載されており、単なる設置記録や行政文書的記述のみならず私には到底読み進められなかったと思うが、当時をしのぶことができ、大変興味深かった。

第4章は、いよいよ南洋庁観測所の気象資料がまとめられている。手書き資料(一部)の写真のほか、「南洋庁観測所月報」と「内南洋気象月報」の発行状況もまとめられている。すべての資料(写真)には、広島大学図書館「気象文庫」所蔵、気象庁図書館所蔵など、出典や所蔵状況が丁寧に記載されているので、当時の気象について、知る必要があったり、部分的にでもデジタル化を試みようという時には、大変重要な糸口となるだろう。

終章には、南洋庁観測所職員の動向が、職員の実名や、自宅住所(町名まで)とあわせて記載されており、本当に驚いた。それだけではない。人名索引も3ページにわたり記載されている。すべての記述は日本語であるが、このようにしっかりと日本語で情報がまとめられていれば、後の時代に、現地(東南アジア)を含む世界の研究者が、これらの情報をたどろうという際にも、大きな助けとなる。本書序章には、西暦および元号の対照表があり、さらには、巻末には人名および事項索引があるので、本書のみで(コンピュー

タの検索機能を用いず) 概要を把握し、文献に当たる場合にも、大きな助けとなり、大変よくまとめられていると思う。

しかしながら、やはり本書の内容がデジタル化されていたら、(外国人にとっては、自動翻訳も使いやすい) どれほど後の人の役にたち、この貴重な事業の拡大、波及効果を与えるだろうと思いつながりながら読み進めた。「おわりに」で著者は、旧満州・関東州、樺太、朝鮮を対象に「北東アジア気象データベース」の構築を行ったと記している。Web で公開されているようであり、この南洋庁についても、組織的にデータ整理がすすめられることを強く願った。

普段私は、大学教務などのほか、アジアの降水データの整理 (デジタル化, 同フォーマット化), 品質管理, グリッド化し公開する仕事 (APHRODITE プロジェクト) を行っている。データ収集のために、アジア30カ国以上の気象庁を訪問し、データ提供のお願いをし、見返りにキャパシティビルディングを行ってきた。そのような活動のなかで、東南アジア、南アジ

アの植民地支配の歴史や、日本が現地の方に与えた苦痛の爪あと、沖縄の惨禍に触れてしまうことがある。本書を読み進めるうちにも、いろいろな思いが錯綜した。ただし本書は、第Iの書評 (藤部 (2014), 天気) にも記載されているように、日本にとって暗い歴史がからんでいるが、この問題には深入りせず、あくまでも気象資料を発掘する研究者としての淡々とした書き方になっている。

「おわりに」に著者が記している「戦争という行為に付随して実施された気象観測ではあるが、(中略) 内地と同じ測器と観測方法により観測された貴重な記録を、デジタルセット化して今後の気象研究に活用することは、私たちの使命ではないかと考えている」点については、まったく同感である。いくつかの国にならない、日本も気象記録のデジタル化、品質チェックを行い、旧植民地に返還する試みがなされたらよいと思う。

(弘前大学大学院理工学研究科 谷田貝亜紀代)